

平成二十六年十月二十九日（水）晴

文語の苑の活動の一つに文語教室あり。その數已に六カ所に及ぶ。其の一つ、横濱市ユートピア青葉にて平成二十二年十月「文語の讀み書き」と題して教室を開設、今日に至る。小生之を擔當して先づ文語の苑編輯の「文語名文百撰」を採上げ、讀解解説して二年半、全篇を讀了す。中に正法眼藏冒頭部分の採録あり。紙幅の關係にて一部中略あるを原文にて補ひ、謂はゆる學校文法と國語、漢和の辭書を頼りに苦吟熟讀して得たる所を講じて大方の理解を得たり。

二年後の今年、福井にて文語の苑シンポジウムの企畫あり。福井ならば永平寺あり、「文語名文百撰」採録の正法眼藏第一現成公案冒頭部分の解説は如何にと提案す。ただ何分にも古典中の古典と稱せらるゝ同書の解説を無名の、而も佛道に縁なき講師に委ぬるは如何なりや、卒都婆小町など人間國寶の名人も生涯一二度舞ふのみと能樂の例を引きて案じなむもゆゑあるべかめり。最終的に原案通りの實行となれるは偏へに小林千鳥様を始め文語を楽しむ會の英斷と深謝申上ぐ。

幸ひに辨道話の第十六問答に道元禪師諭すに引く例とて、むかし法眼禪師と後にその法嗣となる則公監院といふ僧との問答を示さるゝあり、

則公がいはい、それがしかつて青峰にとひき、「いかなるかこれ學人の自己なる」。

青峰のいはい、丙丁童子來求火

（注）青峰禪師は則公の嘗ての師

法眼のいはい、よきことばなり。たゞし、おそらくはなんぢ會せざらむことを。

則公がいはい、丙丁は火に屬す。火をもてさらに火を求む、自己をもて自己をもと

むるににたりと會せり。（注）十干は木火土金水の五行を「えと」に分け丙丁は火のえ火のと

禪師のいはい、まことにしりぬ。なんぢ會せざりけり。佛法もしかくのごとくならば、けふまでにつたはれじ。

ここに則公（中略）禪師のみもとにかへりて懺悔、禮謝してとうていはい、「いかなるかこれ學人の自己なる」。禪師のいはい、「丙丁童子來求火」と。則公、このことばのしたに、おほきに佛法をさとりき。

「丙丁童子來求火」とは童子火にゐて火を忘れ外に火を求む、自己をならひて自己を忘るゝの謂ひか。孰れにせよ我も亦「汝會せざりけり」と言はれむを覺悟す。

シンポジウム當日、愛甲代表、仲兩幹事と共に参加す。快晴に恵まれたるは天寵なるかな、講演時間の急遽半減も、僭越の試みに天の戒めなりけむ。なほ兒玉忠様には絶妙のパワーポイント操作を賜はり、最後を「汝會せざりけりと喝破せられむ」と結ぶに、大きき笑聲と盛なる拍手を頂き、忘れ得ぬ思ひ出となりぬ。

この日文語の苑を親しく御指導頂きし岡崎久彦先生御逝去。謹んで御冥福を御祈り申上ぐ。